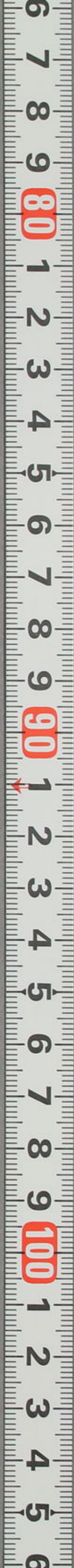


先進繡像玉石雜誌

信



先進繡像玉石雜誌卷第九目錄

贈從三位藤原為子真景并傳

御子允

賀茂神主氏久

典侍

萬秋門院瑱子

一宮尊良親王

賀茂川水位

皇后宮御連

式部少輔英房

姨を妻と以

休々木時信六角乃家

對乃屋

禪林寺

宗良親王

八王子

赤山

唐勝合戰

一品法親王乃始

南都合戰

白輪湊

濱袋橋地理

今切

六谷寺

欣子内親王

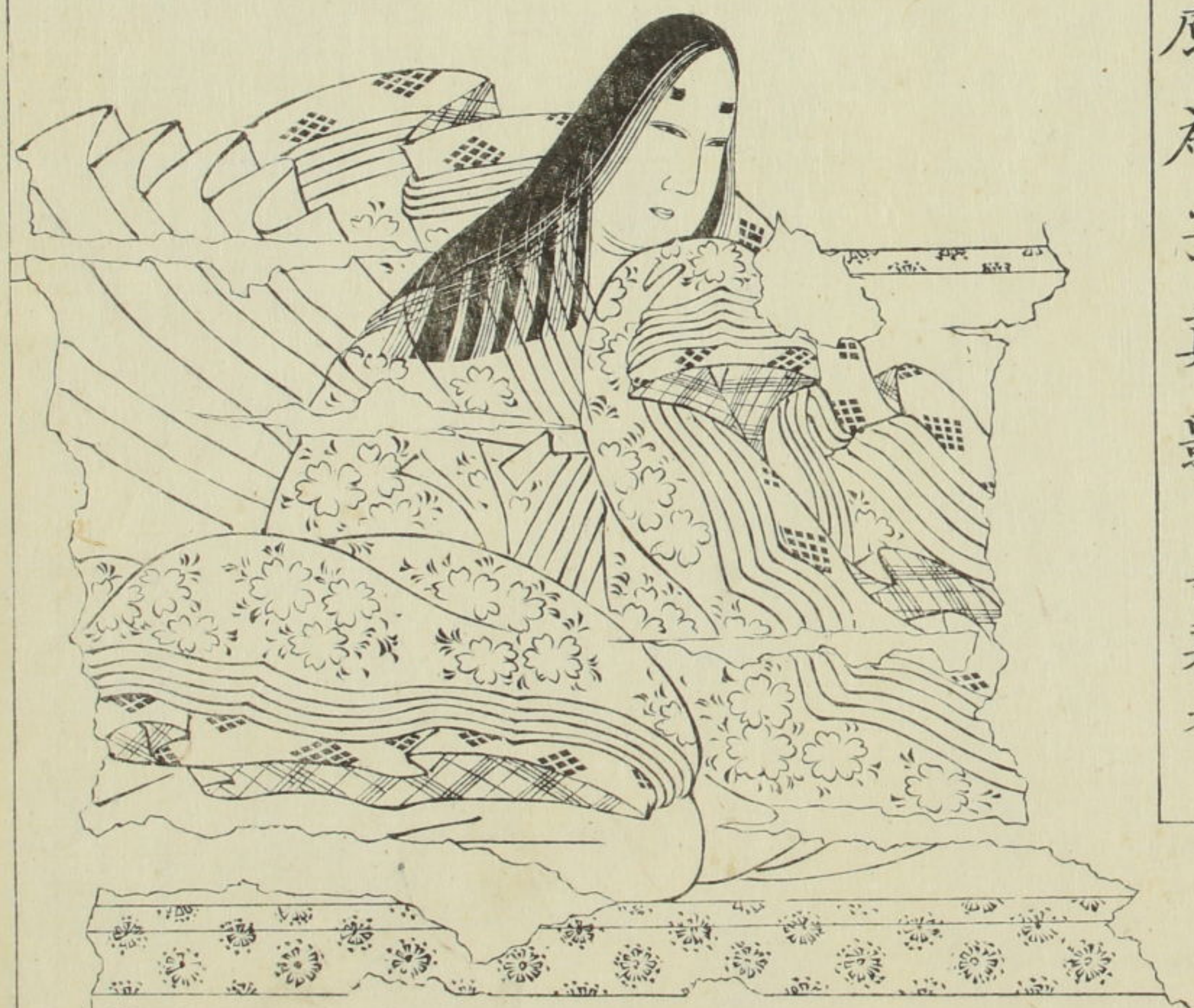
瀧子内親王

女御三位

先進繡像玉不雜誌卷第九目錄終

九ノ目

贈從三位藤原為子真影 古摹本



信亮手寫

贈從二位藤原為子乃御子九次大納言為世卿乃女末里母ハ
賀茂神皇氏久女弘安七年御子九乃家小く延生あり
御子九乃家と云は拾芥抄ハ三条坊門南大宮東兼明
親王家長家卿傳領之とあり兼明親王ハ延喜帝乃皇
子初源氏小かせ世孫ハ承平二年十九歳小く從二位
ハ小叙一因三年攝關推守小任一天祿二年又十七歳
小く九次大納言進之孫ハ後世人御子乃九次大納言
云義を以て御子九と稱せし形なり
貞元中九次大納言を止め
二品中務卿小て親王
小かせせらせたり
延喜中書進と云
を養ハ御堂関白道長公乃ハ小く藏人乃少將と申け
と堀と小かせせり代家を讓らせ親王ハ嵯峨乃龜公乃

側小教作一々住せ孫ハ小く御堂教乃次男堀川教
公ハ男長家卿ハ家小く延生あり長家卿此家を傳之
領一五ハ次男大納言忠家卿ハ傳之り推中納言俊忠卿
皇太后宮大夫俊成卿推中納言定家卿推大納言為家
卿推大納言為氏卿大納言為世卿小くハ代相承あり
小里賀茂神皇氏久女續子載集小ハ河了花乃流之を
見く從三位氏久
散花乃波を岩根了吹去一々風ハ小く海小く山何乃水
色深くうのり多小く狩人乃被了日く海菘乃朝
と云款を載らせ一人あり
後二条院即位乃々々典侍小系里小ハける小主上款を

好まをよめりしより王御寵ましく他了矣あり

典侍ハ職負令了口人掌と尚侍了同典侍ハ二人供奉掌侍奏請宣

傳檢校女内命婦の朝参及びたの奏請宣傳を

紫内社式を兼知しを掌るとあり

之を得され若尚侍あり時々奏傳宣傳を之を得と

云職原鈔不上臈是非を謂以二三位典侍を云赤青

色を著く御陰膳了候もふあり是等乃職了補を以

く色を聴き教く冬大長乃女或大長孫也かといふ

續子載集不赤元百首款なりくと云花を

今よりまきくあく花乃傳ふたけく乃ふの之孫乃まき云

郭云を 郭云あなめ乃根ふもあふくふ月をけく何まき云

螢を

大外河室子も持るやわら火了あきぬる秋の思ふる院

紅葉を

立田川水乃秋をやいそくらん紅葉をまき入嶺乃嵐即

哀款乃中ふ

枕たり知て人といふあくゆか人目をくりをせめくはまん

迷懐乃心を

集了載らる 秋款乃浦ふたよ入波乃名計をわけく真乃有ゆを

又同院位了おきしゆける時人ふめせれ三十首款乃中ふ惜

名哀といふを

もらぬまふ哀ふあきやとお入まき命ふ増るうき名あまは色

不遷之志

行たへとおあし世まくりぬるる契かき明と難面くる境
然るる後醍醐天皇いまく帥宮と下ける澳いふかふ玉簾乃
間末め多ひけん君ひくく御消息乃數つそりけさハ遂に宮
ふ系里そめ玉ひ徳治元年男御子生さる何ことを憚せ
らさるや吉田定房後内侍大長兼養老ふふく兼らをたれハ
彼亭に移ら勢らさけるりけ御子三歳ふあら玉ひける秋
後二条院崩御あつて花園院即位す備し帥宮東宮ふた
せまひくハ典侍ハ大納言の局とく春宮侍をさけし其
翌乃年六月二日葛蒲ふけけり万秋門院乃ゆへ大納言
乃局

そふろくろつ世りそひけり昨日より神乃浮ぬハ於此の次
とありけ家返り万秋門院

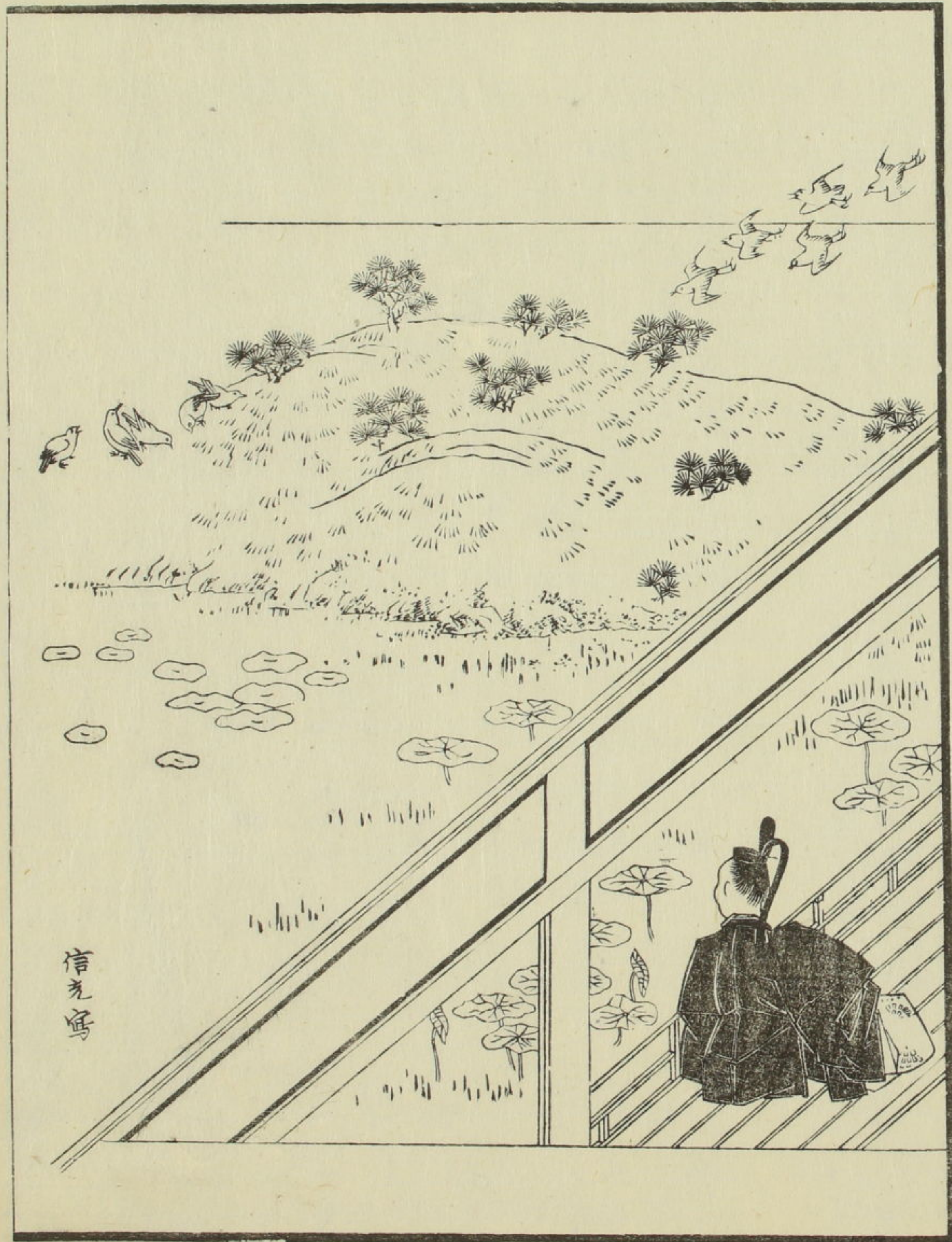
吾のこむりをかけり神乃上るる人そりねを又そ流ける
とそ是を後二条院乃御事を思召いそりあるへり

萬秋門院後原瑱子勲甲公孫瑱子とあり今考ふ字
記す瑱字あり後原系國瑱子ハ
記す瑱子ハ圓明寺攝政一系實乃女後二条院御母方乃
祖父内大臣具守公乃家らおろしけ家頃沙院ハ初
らさけふら後二条院ハ弘安八年降院より承仁六年御年
十日ふく御衣服より堀川乃内大臣乃家ら
おろしゆり嘉元二年三月尚侍らあさささる後三位叙
々ふあり
せらる後二条院十九徳治三年八月廿六日後二条院
崩御乃後尼とあり勢ふ入瑱子後醍醐天皇即位あり

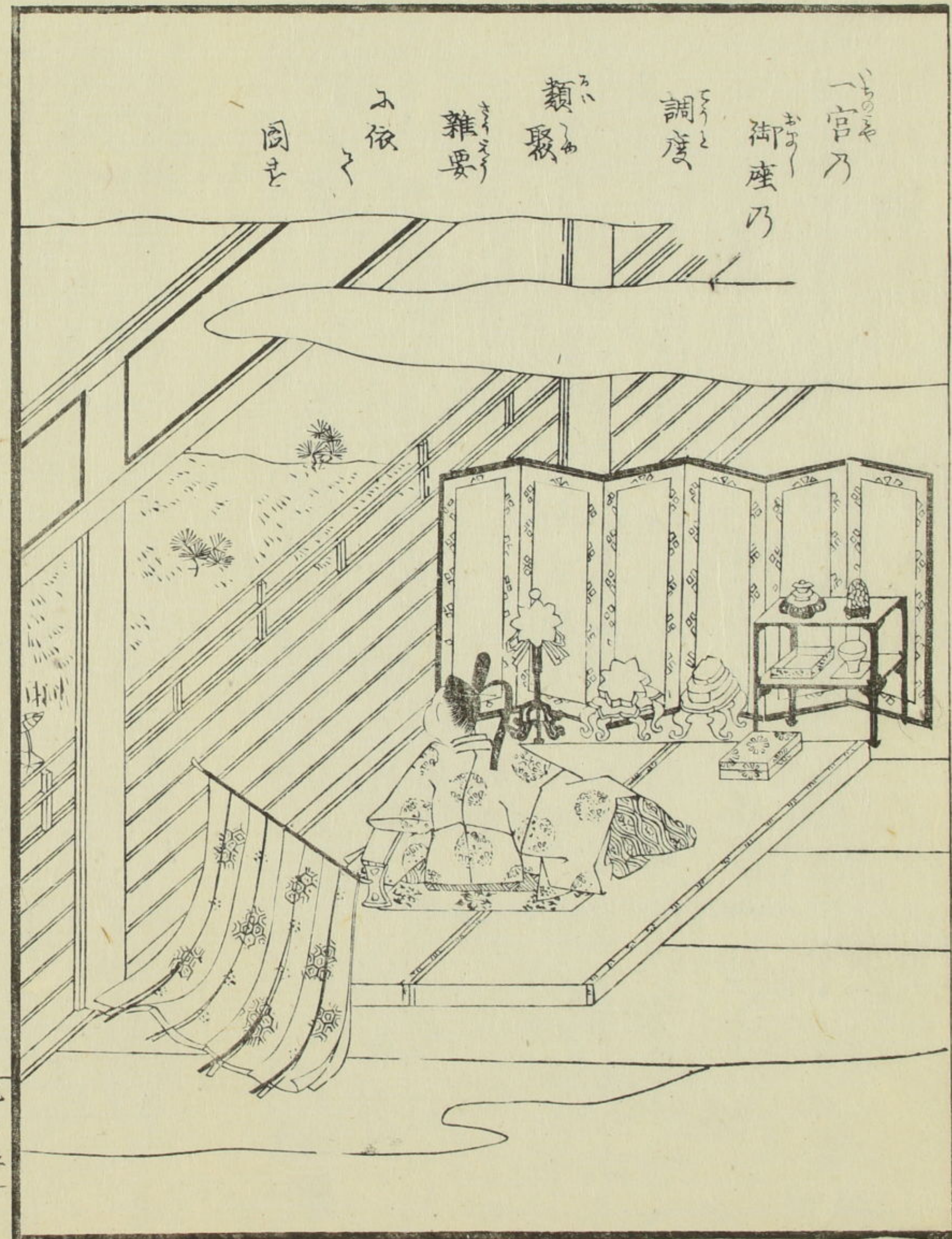
元應二年二月廿六日准之辰乃宣旨乃後萬秋門院
と中以身六十三延元二年三月薨終年七十一
正和元年より男御子誕生すゆとこれの妙法院に入室有
て後み天台座主尊澄法親王とすてりて還俗ありて宗良
親王と中是あり娘御子二所欣子内親王瓊子内親王とて
おとすまをりて御産乃年々定るありて

一宮ハ總角乃頃より螢雪乃力急慢きまを以て桂乃枝
折る難うて見えさせむひけむの後醍醐天皇御位乃
とありて宮を東宮ふと慮慮も人望も同くかまけると思
乃外園東乃討らひて邦良親王坊に居せむひて
ハ一宮の御方様乃人のひてへて輟魚乃おひをあげけるふ

宮を偏ふ風月了懐を暢之花鳥了心を澄しめ坐すける
嘉暦元年御元服ありて之品了叙し中務卿に任し給
ふと云とも於北白河乃御所におくゆ瀨見乃小川乃溪
溪不嗽き月待ふ乃月影をせりて録めしつてふと明暮
させ給ひけるは関白左大臣道平云嘉暦二年二月十二日関白了
任し元徳二年正月廿六日罷らる
乃家みくかよ上を教教三人あま集り繪合乃有ける時
洞院乃右大臣公賢卿嘉暦元年十一月四日右大臣に任し
徳二年二月廿二日罷らる太平記に左大
將とある乃出させたりけり源氏よりせりて乃宮の御女を
おし楨柱に居られし雲かくしたる月を撥めく招きた
るけりをわきたる繪と御鏡と御心ふりてりて繪
をり置也巻かへりて御鏡さらる也と御心なるべき



信光寫



一宮乃
御座乃
調度
類聚
雜要
不依
國書

九ノ五

言を笑を人々を愁殺とと武帝乃歎きぬ一昔倍我ハ
繪みかけふ女を思く徒み心を動きふり如くと紀貫之の僧
正遍眼を難ずも御身乃止み思き世をせぬ御心や里乃
方りやと賀茂川合の宮へ詣りてせ給ひ御手洗川
茂井上神社乃下より涌出る清泉ありホクトメ一トルを
水乃性考ふる京都中乃水懸は至清烈ありあ
試す其次第を云へ一泉をホクトメ一トルを
寸七を清き水寺普乃龍一尺七寸五分六孫王誕生水
及ひ走井水一寸八分又美濃國可兒郡識坂一
清一丈七寸五分同國加茂郡勝山村清水一丈八分同國下
國筑摩郡妻籠一丈九分同國所温泉一丈九分強江戸神田
詠乃觀音前水一寸九分同國西乃井一寸九分強江戸神田
我家乃井泉一寸八分酒乃藏一寸四分
水性乃善し沈むと知へく悪乃河水を御手水了結
是何となく川子道逢せさ勢ぬひそ乃夜ハ為世卿乃御

子虎乃家了渡らせぬさうく一糸を西へ送させ玉
人々々今出川乃邊ふ垣に苔むし毛了松生年久しく住
荒した家宿乃物さひくも不撥音けくく青海波をを彈
たるあやしくやいらね人からんと通りつゝも御車を止めさせ
遙ふ見入させ給ひて色ハ年乃不と二八許あふ女房乃云
許なく艶麗あふら秋乃別色の惜まれく雲間乃月を招く
みくそ有けるはくくと御覽さるふ此日頃御心を腦ませ
たふ繪いたくけ女房乃寫繪あまと思召せといふ世傳と
思もをよむとよさくら御言葉ふ出されさうけるを常ふ御會
了系里あふ二条中將為冬ハ快き也賀茂乃御かへるせ
乃不乃々あま宵の間乃月又由清流をゆめなく思

めさ新くふや其事ありハ最安きてとありて其體なる兒
也彼女房乃乃糸をくりく尋て以へハ今出川右大臣公
顯後西園寺大相國實兼公之助後醍乃娘みくハお茶を
徳大寺乃乃天將清み中おはけかきいませ皇太后宮
院後醍乃御匣みく候お茶御匣ハ今乃御納切お茶
以ち之の御會ふやよきく彼亭へ入をよひくよこれの
ひよふも自御んありと云ふとよきいへりて中せの宮
例あり守所んよけふお笑みひやり今其亭あり
りやゑん乃乃所會ありと云ふと右大臣乃乃方へ作おき
今也ハ公顯元亨元年二月八日薨一宮十六乃歳ふく
云顯公薨徳光朝政清郷十歳お皇嘉曆年と云れハ
あく久しやけあしと取まて汝きて數寄乃人數多

集里くかくと案内中せの宮為冬をりを所供みく彼亭
へ入をよひぬ款乃この今夜きまき乃所奉意あり孫の
たく披講をりふく寝殿をふし主乃大臣小動乃いそき
あつくと土器の糸里たせの宮常より中興をささむひ
野曲絃歌乃妙々了御盃給せむひたせハ主もいよく群臥
ぬ宮も御枕を傾けせむへハ人々静まりく小夜も御
更ふたり媒乃中納めありく酔きりたせの其案内せ
きせく彼女房の住けお西乃對へ忍ひ入せむひ曉も糸
を語らひむへと中女乃御いへもやきく一向難面も
てかゝ糸らせたせの御んハうりを留めまきく立か登ら
せむひぬ其後の度く御消息ありと云ふつらふ東ふも

ありぬらんと覺ゆるはくも積里々色ハ女ハ哀甚か
方るんひうきく昇進ハ降る船舟乃香りのあり以と
思へるけしきよあん顯を色たりのされとゆれ互人目を
中乃園守ふあしと月頃過させむひけるふ式部少輔英
房文章博士後京明衛朝臣七代乃孫文章生長英乃長
英房あ里文保二年四月十四日遊仙窟乃談書たる人
あと言儒者御文談了系しと貞觀政要を讀けふ唐
太宗鄭仁基の娘を納んとせを魏徵諫く代娘までふ
陸氏了約せりとせしうの太宗宮中ふ召ることを止む
ひそと談しけふを宮つくと閑召く我ハいあき人
乃云あつけく事定つたあけをさけんとい討呈けるや
と頻々慚むる御文ハ書絶させむひける徳大寺

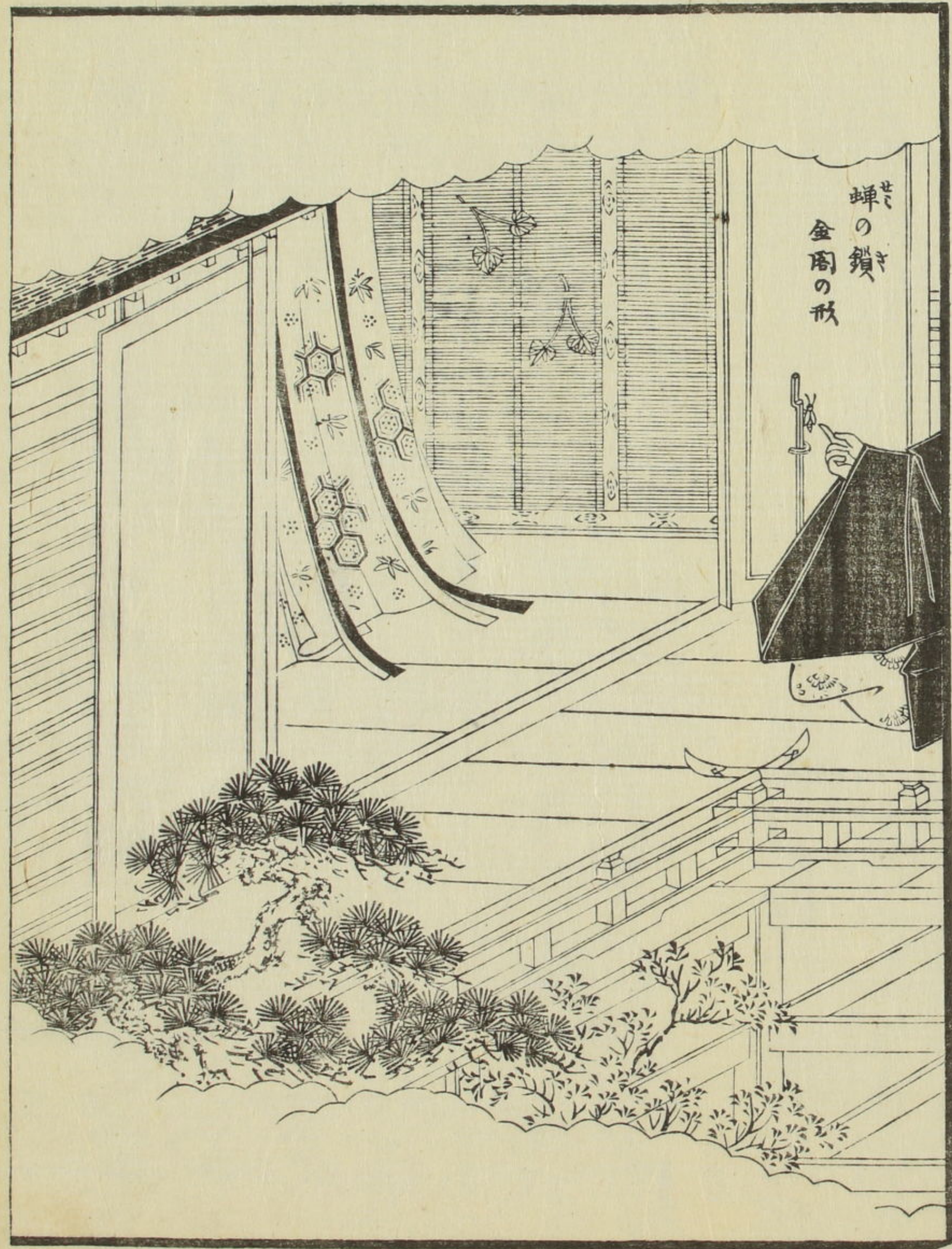
此事を剛及ひ今出川家と離別しと中園相國公賢云
乃息女ふ通ひけふ世閑きけ色の官ハ今ハ御憚あかき
ねと御文乃あつしあいつより思を止まき
船をまや塩屋く浦乃畑たよ思をぬ風了廉くからひを
女ハ餘里ふ難面うろしん乃知と我あき憂あふ思返まふ
ふかん成りけ色の詞ハあき
まぬへそ浮名をわねく思をぬ風ハ畑乃あひらきあや
其後より彼方此方ふ結ひおろけしん乃下細井とけく
さよ乃枕を川島乃水乃んハ浸るぬ御契あき男御子一
人おと海つれし御匣教いく不とゆあく病ハ依りうせ
まハ一の暫時ハ歎了義ま海けるふ又大納言典侍

とく權大納言為世御乃末乃女乃ありけるも通ひく女
王一所産せむ人尊良親王乃母の妹あせの婚嫁を免せ
るへきみあらは然也と由二条院乃中宮高松院とヤ
せし鳥羽院乃皇女みく二条院の父方伯母みよ
後深草院乃中宮東二条院の母方乃叔母あま元弘元
嘉祥乃例る候り當時めけりけありけりみや
年八月笠置へ潜幸乃時宮も同く約啓ありけ共
一川城子移らせむらん謀かきりぬしと思召せ宮ハ
河内國へ打向をせむハ楠ら赤坂乃城へ入御す海ぬ
移り笠置乃城落せれ主上大和路へ潜幸ありぬと
同くかは宮ハ御近乃ため南都をさくく打立せ玉
みと云と由主上もや平等院へ入せ玉人と同食く宮
小京へ還御あせハ六波羅乃仲時北条越時益北条九
後守 迎將監

議とく佐々木判官時信備中守頼綱六男あま太郎
乃六角東洞院乃家六角通乃藤東洞院の東今今洞司
前建仁の頃武藏守朝雅あきり住其後時信乃領とあま
つせり代流を六角の佐々木と称を四方一町の地あり
不止免置あせも二年三月七日主上隠岐島へ遷幸あ
りしハあせも八日宮を土佐國へ移居あせへきと由
堰とむあせもくこせ移り渡川ハふ流る浮見あるらん
十一日乃暮れとふ兵庫了着あせハ京より兵庫へこれ是より御舟
みめく土佐國幡多乃郡有井三郎光衛門尉ハ許へ渡ら
せらるあせも同二年四月より十五月の間海よりけあ
主上隠岐島より還幸ありき海内公家一統乃王化ふ
服せハ及宮ハ有井を御供ふて去渡せさせ玉元の

如く一條堀川乃御所了 乃地なり 歸入せよひけり
程なく建武乃亂起 皇足利尊氏官を止めらば 追討の
宣言を下せしむ 官を上將軍と 新田義貞朝臣を副
將軍とあせしむ 既小都と進發あり 三条河原を過せ
せよひけること 御旗を付し 里けり 日月乃紋地小落
けり 亦我ありとあせ せよと 小矢割 鷺坂子越乃軍小
打勝 亦ひあせ 中書王乃御手乃兵 志あり 小勇敵を輕
志く 竹下乃軍小利を失せしむ 遂に都へ引返り 斯
里の東風志あり 吹競ひ 至し 山門へ臨幸あり
後臺夫夏を猶里 宮殿鳳樓之池魚乃 吳小羅造營乃
沙汰いさく 遂に 至し 二夜台嶺了 鳳輦を廻せり

華澄官焦土とあせしむ 官中東塔子 登り 日明乃巔
子奇 函乃兵機を練調あり 至し 山と 聖運時 至らば
六軍和せし 主上都へ還幸あり 官中東宮を補佐
志く 義貞義助以下 乃官軍を駈く 北國乃雲 鞭と揚
らば 越前國敦賀郡金崎乃城 入り 是の氣比大官司
の築たる城あり 山門より 縮川へ 二里 縮川より 和木へ 二里 和木
律より 二里半あり 越前國山内郡 大溝を經く 則律へ 十一里半 則
律より 四里あり 越前國山内郡 尾張守 高經 庫を破り 路をさし 塞
と 障あり 則律より 塩津 柵 瀬 橋 市 中河内をへく 林 間 峠 へ 十
一里 林 間 峠 より 金崎 へ 二里 不遠 九 里 程 三 十 里 餘 乃 路 を 日 月
抄 せ ら ぬ こと 云 一 日 入 七 里 餘 乃 路 を 終 へ 一 日 入
七 十 餘 騎 と あり 九 之 萬 八 千 人 許 あり 今 代 道 を 過 ぐ 艱 難
入 難 事 と 云 人 官 乃 終 此 中 國 中 へ 披 露 あり 仁
本 賴 章 高 師 泰 大 勢 あり 押 寄 即 ち 色 を 十 重 女 重 小 園



みありくそ死ふけあ宮やく其刀をめされ御院さる柄
はみ血あまうて薄る色御衣乃袖く刀乃柄をさる
押巻をよひ雪乃如くか御膚を露し御胸乃邊み突三
義顯り枕違ふふ勢あ御年廿二頭出ま行房推言
行成卿十一代の孫藏人頭み右京里見大炊助時義
大夫かろを以て頭大夫と云か里
武田餘一氣比弥三郎大夫氏治大田帥法眼以下御家
みひひけありいさらの宮乃御供仕らんこ同音る念
佛とかへくつ及る皆腹を切と云里太平記御匣致
事記し秦武文の奮死の事を録を然也其御匣其後
致の逝去心銘丸乃前不柱の念成謀をとらひ
御首を京へよせまうけるを尊氏禅林寺に迎ふら
世夢窓國師を導師とて葬儀を修りありと云禅林寺

元ノ三

今永觀堂と云南禅寺乃北若玉寺乃南あり當時を
てみ今乃宗改め西公乃浄土宗たり夢窓國師乃
居みあり以蓋南禅寺乃地公藤原國雄の舊宅み
後み禅林寺と号せしる龜公法皇の離宮と成み及く
禅林寺を命り地乃後たり然也と云後舊乃名を唱えく
龜山法皇を禅林寺乃法皇と稱し法皇乃離宮を改て
南禅寺を造營ありみ世に喬謹中書王乃履歴を
唱み習る禅林寺と稱するか里
編次一草里竊る考入る高貴皇胤乃旗旌を廉一干戈
を執る三軍を約み入る五瀬命日本武尊等ハ邈形王
近く高倉宮後鳥羽院順徳院無禮を匡し不長を討
せら新ここの頗威烈を示さ新くと云とも其事敗る不至
てわを東孫く仇乃進止了就をよ入る慨歎痛惜不
堪中書王風月み嘯詠し悒鬱し居緒を送ら給
ふ了當りの唯閑雅乃貴遊を感賞し来るかて狂るを元

師乃任了膺く東征北伐力を竭せし身死後了止其
意氣悲壯慷慨真子高驥虬鬚乃將軍と云と過へり以
南禅の畔何乃處りあは王乃佳城か分後事を思暮く
躊躇去み思ひま

宗良親王ハ正和元年壬子歳に誕生す
妙法院性守僧正天台座主百十二代俗姓ハ乃室了入
世多御得度乃後乃尊澄法親王と申けふ元徳二年
十二月十日日善法院法務権僧正慈嚴了代す百廿代の
天台座主了補せらるる三品了叙し御年十九より満ち
終る元弘元年八月廿日主上門を御憑あうく
登山す備け色ハ尊澄法親王ハ時乃貫首あて殊る

御門徒乃内了別勅を蒙り老も多く護正院僧都祐
全妙光房阿闍梨玄尊等志を一川あうく守渡しなり大塔
乃尊雲法親王ハ御兄了御座のニから以前座主あて始り
大儀を思召立し奉人あしあは其曉直ハ五子へ
御上あうく錦乃御旗を奉らせけしハ西門主を援えんと
三百騎ハ百騎あうく馳集り了既ハ六子餘騎あ及
へりハ王子の輩ハ五王二宮乃よああり同廿八日六波羅
より里に十八ヶ所乃備小畿内乃勢を差添くハ子餘騎追
手乃寄るく赤山乃麓下松乃邊へ差向ら敷
小あり敷山乃西坂本あり下松ハ一乗寺村乃入り
波羅より爰了至るハ二里許あしより不動雲母坂を經
て西塔了あし道凡五十町不遠然ハ嶮岨あし
く並行へりす五子餘騎ハ馬を揃り行あし進へ

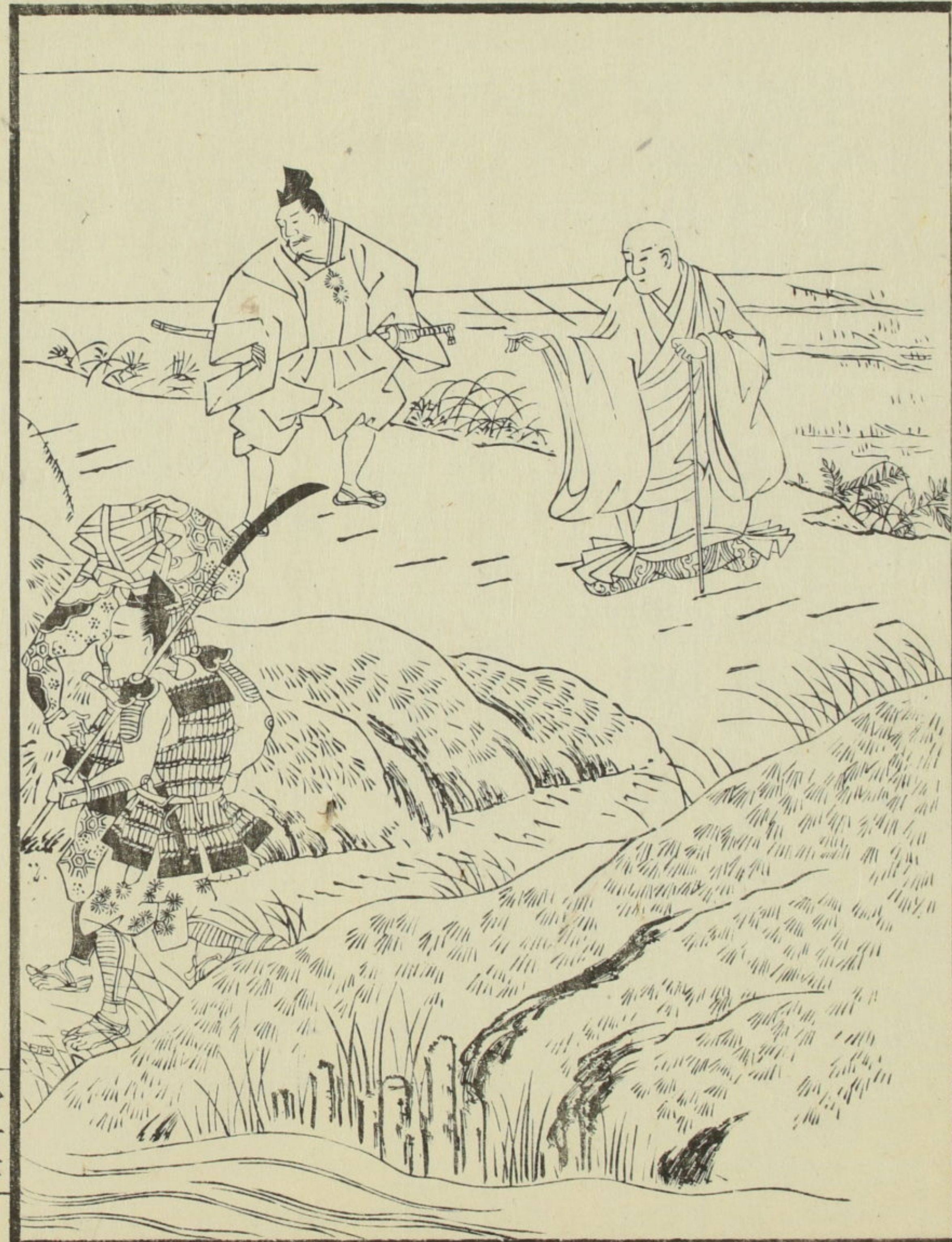
赤山今
修善院村

魚一歩十人を列ね五百歩了五千人を
へし即前後相距一五百歩今乃八町余を隔りと思ふ
六波羅へ開つらんあまのこも六日・廿六日・廿七日乃三
日不致と合戦了破へるかま 擲小へい佐々木三郎
判官時信海東尤近丈夫將監長井丹後守宗衡筑後前
司貞知波多野上野前司宣通常陸前司時朝了美濃尾
張丹波但馬乃勢を帥し先く七子餘跡大津松本を經
く唐崎乃松の邊へ寄りけり坂本も兼く用意せし
こかまの圓宗院中乃坊勝行房かと云早里雄乃兼大
衆二百人許唐崎乃濱み出向ふ海東是を見く敵の
勢あま後陣の勢の續くぬ程了駈散さくそ叶ふまじ
進めや者とよと云まふ三尺七寸乃太刀を發射向乃

袖を差ひさし敵の渦巻くおつくる真中へ馳入敵二人
切ふせ波打際み馬をひくへ續く味方を待ところへ岡
本坊乃播磨堅者快實たるわり是を見く二尺八寸乃
小長刀水車了廻く躍まのる海東是を弓手みりけ
甲乃鋒を真二了打割んと片手打了打けかゝ打外く
袖乃冠板より菱縫乃板ましく片筋違ふの糸を切く落すと二
太刀を餘里み強く切んとて弓手乃鏝を踏折 鏝五尺乃
既了馬より落んとしけるり乗直里けか糸を快實長刀
乃柄を五乃へ内境へ鋒あうみ二の三の透るもかくん
里けりみ海東認以喉管を突きく馬より去逆し落ふり
快實頓く海東の總角了乗り首搔切く長刀み貫き

武家乃大将一人討死す物始りと悦ぶと悦ぶあざ笑てき三
大里け家爰不見物元乃中より歳十又六計ある見乃髪
唐輪了揚をばら鞠塵の筒丸了大石乃側高くより金造
乃小石刀を抜く快實乃斃乃鋒をまきくうふ三井に打そ
打くりける快實きつと振返り長刀乃柄みく大石刀哉打
落し絶止んとせし紙を比敵過乃者射ける横矢不
見胸板を伝と射貫せしるふはより死みけり後誰そ
と尋ぬせし海東の嫡子幸若丸とそ知せり海東父子
討せし寄平引色り見えける知る本院乃大元七子餘
人之宮林をおり下り秋永片田乃者と山の兵船三百余
艘壇ありぬ海に漕あり六波羅勢の後を遮んとせり也

見く滋賀乃阿魔堂乃前を横切ふ今道ふり引返
を流後を案内者あり爰彼乃法より落合く散々み
射る海東の若黨八騎波多野の郎黨十三騎美野入道
父子二人平井九郎主従二騎谷底あり討せりり
佐々木判官も馬を射させしと見えけるを
若黨とも返合せ死せり万死を出く一生ふあひ白晝
み京へ入ふりかくる山門初音乃軍も打勝事始り
悦ぶを斜あり皇居を東塔了後了をふへしと西塔へ
中送りける即鳳輦を催せしりか折ふ烈き深山
風了御簾を吹よる隙より龍顔を拜しとふのふ
らみ主とありのゆゆゆ尹大納言師賢卿花山院内大臣 師信



乃男乃男彈彈乃乃故乃乃衾衣衾衣を着着し玉玉へるへるみみくく抄抄有有け
るる乃乃大納言大納言と祿祿をを興興を醒醒し院院々々谷谷々々へ走走り取取りし中
を披露披露せししふふ系系後後乃乃元徳元徳を替替しし殊殊了了上上林林坊坊阿
闍梨阿闍梨豪豪養養ハ元東元東武家武家了了んんを寄寄ししハ妙法院妙法院の執事執事安
居院安居院乃乃中納言中納言法印法印澄澄俊俊太平記ハ大塔宮執事ハ此
今妙法院ハ同記ハ後ハ
を捕捕り六波羅六波羅へ出出し護正院護正院僧都僧都猷猷全全ハ八王寺八王寺乃乃一
の本戸本戸を固固めたりりハ叶叶すすハ叶叶すすハ也思也思ハハ同
宿子宿子乃乃若若を引連引連り六波羅六波羅へ降参降参以以是是を始始とと一人
落落二人二人落落おちおち乃乃引引けけハ今今ハ先先林房林房律師律師源存源存妙光房
小相摸小相摸中之坊中之坊乃乃悪律師悪律師之之口人口人より外外ハ落止落止るる元徳
ハ無無里里けけ也也ハ廿九日廿九日乃乃夜半夜半ハ及及くハ五五子子ハ海海火火を

あまあまくく處處ふたふたううせせくく未大勢未大勢乃乃勢勢里里大大るる由由を見見せせ戸津
乃濱乃濱より小松小松りりめめと後後落止落止るる所所乃乃衆徒衆徒之之口人口人を召具
せりせりとと乃乃石石ふふへ落落せせとと玉玉ハ爰爰ああくく西門西門主主一一所所へ落
と勢勢玉玉とんとんととハ計略計略ききりりぬぬ子子似似ととハ上上妙法院妙法院乃乃宮
ハ御御乃乃歩歩由由ハ以以ててハ御御乃乃邊邊りり御座
へへとと申申ふふとと笠置笠置乃乃岩窟岩窟へ越越せせとと玉玉へへハ大塔宮大塔宮ハ十津
川川乃乃奥奥を志志しし乃乃南都南都乃乃方方へへとと思思ははせせらら執執行行るるハ笠
置置乃乃城城臨臨りり主主上上六波羅六波羅へ遷幸遷幸おお里里けけ也也ハ妙法院妙法院宮
由由おおかかししくく六波羅六波羅へ入御入御あありりけけふふを相摸相摸入入道道崇鑑
りり許許ひひととくく讚岐讚岐へ移移しし系系ららをを殿殿乃乃御御殿殿次次乃乃警固
ハ長井長井九九連連大夫大夫將監將監高廣高廣ううけけ玉玉ととくく元弘元弘二年二年三月

八日都を出せ勢多ハ十一日乃晚程不揚津國兵庫乃
津入着せら建安より御船を奉りて讃岐國へ渡らせ
多ハ寒川郡志度寺に同三年六月より御座けり
上都へ還幸ありぬと肉食をくく上流より一けし御
公務元弘元年の儀了違をせらねへりせとと重ねく
宣下乃沙汰了及たせ以我乃月廿二日拜堂拜賀とけ
約とせらぬと建武二年二品叙し延元元年正月
工山門へ臨幸ありしハ三塔乃無徒涯分乃力を奮
て奔走し車里けり猶も其ふをとらんとハ慮ふや
や海一けん宮ふ一品乃宣下あり
明雲僧正ハ嗣々天台座主第五十大代乃歷了昇坐
ひしを破く始と以それよ全以前ハ皆海徳年備ふ依

て任せらせし程了大法師位あり法橋あり僧正あり大
僧都あり里權律師あり推判僧都あり法印あり大僧正あり
里一室あり二品法親王ハ天台座主第七十代尊
性法親王を始と一品法親王ハ此勳登法親王を始
以山徒ハ少く忠款を竭し勳士類ハ軍機を運せと云
やハ帝徳天心了垂けりやハ上糧未ハ盡たりし
あり十月九日尊良親王を越前乃國へ尊澄法親王ハ
遠江國乃井伊谷乃任人井彦次郎景直井太郎直貞等
ハ先陣舟を習習湖を渡今濱生来りしハ里義濃路を經
冬河國賀茂郡足助重春の館に入せしハ遂に遠江國引
佐郡井伊城に移り玉ハけり同二年夏の頃ハ伊豫國鈴
鹿郡一瀬と云ふ乃奥ハ李花集ハ見也今ハ岡坂下乃同ハ
太越ハ伊賀國柘植郷に任せしハけり了郭云を肉食く
ハ至る路ハ柘植あり

山院を御出ありて廿二日ヤサシに秋國內あきのくにへ入御いりまへ其後そのち
吉野へ臨幸ありし早はやに年とし不あ成なりぬ也なりの都みやこへ還御かへりまへを祝いわ
ささく谷やより出る聲こゑ岡おか也なりとの詠よみせよ入いるあそへへ八月はつげ日ひ
了しま准のり后ご 慶けい子し 尊そん澄てい法ぽう親しん王わう乃なり 繼ついで
乃なり御ご許もとより 葛あやめ蒲の根ね了しまそ
へく

又また記しく我われたのむん乃なり深ふかき江え子こ引ひる葛あやめ蒲の根ねとと知し南なん
とと欣よろこら也なり御ご返へん事こと小こ

深ふかき江えも々々さまざまを以もつてあるあそめ子こ君きみうん子こ引ひとと思おもひ
其その後ち准のり后ご乃なり御ご方かたへ系よらせよひたりし葛あやめ蒲の乃なり御ご款くわんを
内うち乃なり御ご方かた 後ご醍たい醐ご 乃なり御ご物もの終はらまりしととかや 此こゝ
款くわんとと小こみく延の元げん四年しよんねん乃なり三さん月げつ乃なり順のり澄てい法ぽう親しん王わう吉きち野の小こ
中なかへ備びえしとと明あらるるあそめを延の元げん三年さんねん九月くげつ義ぎ良りやう親しん王わう

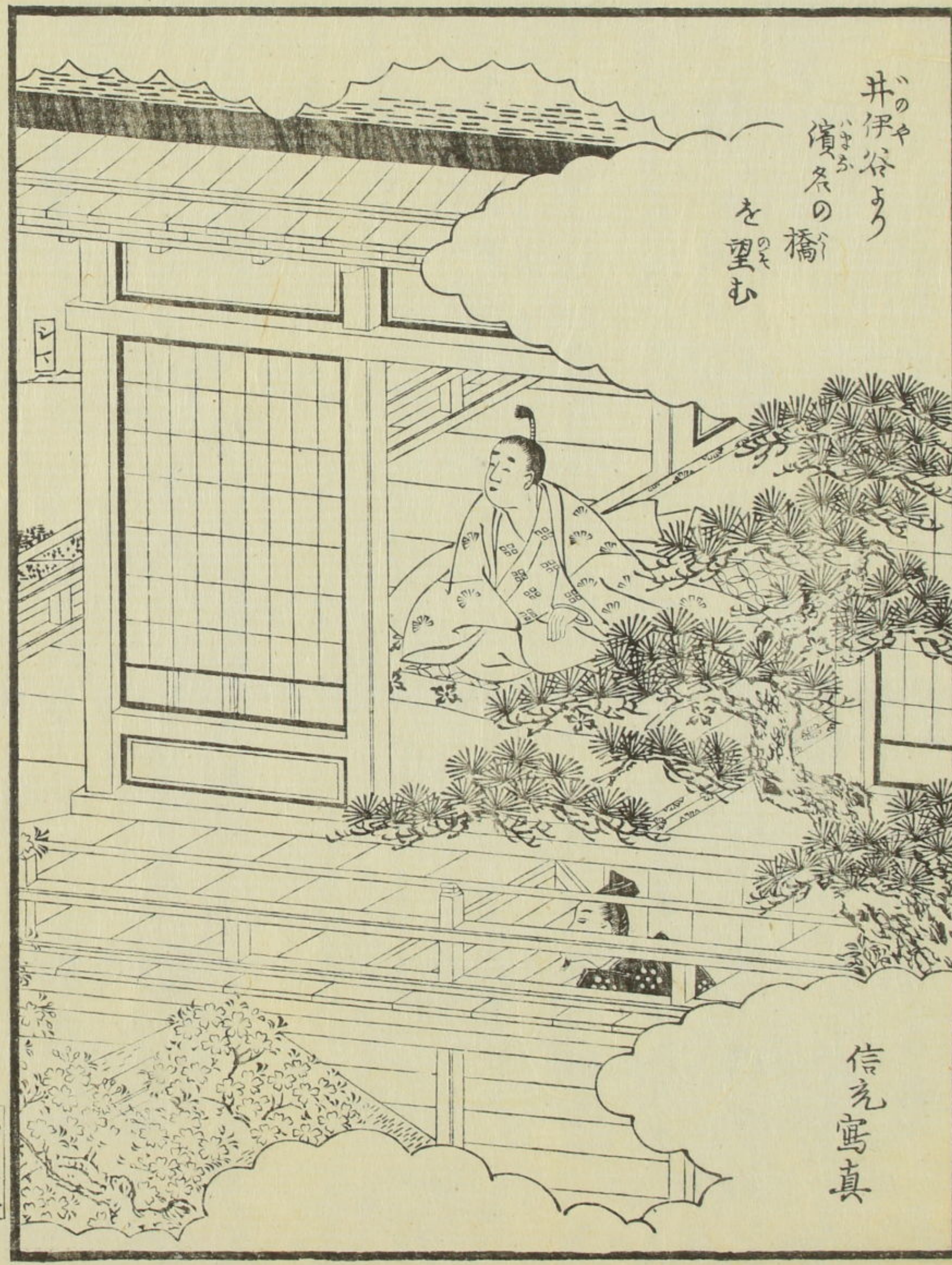
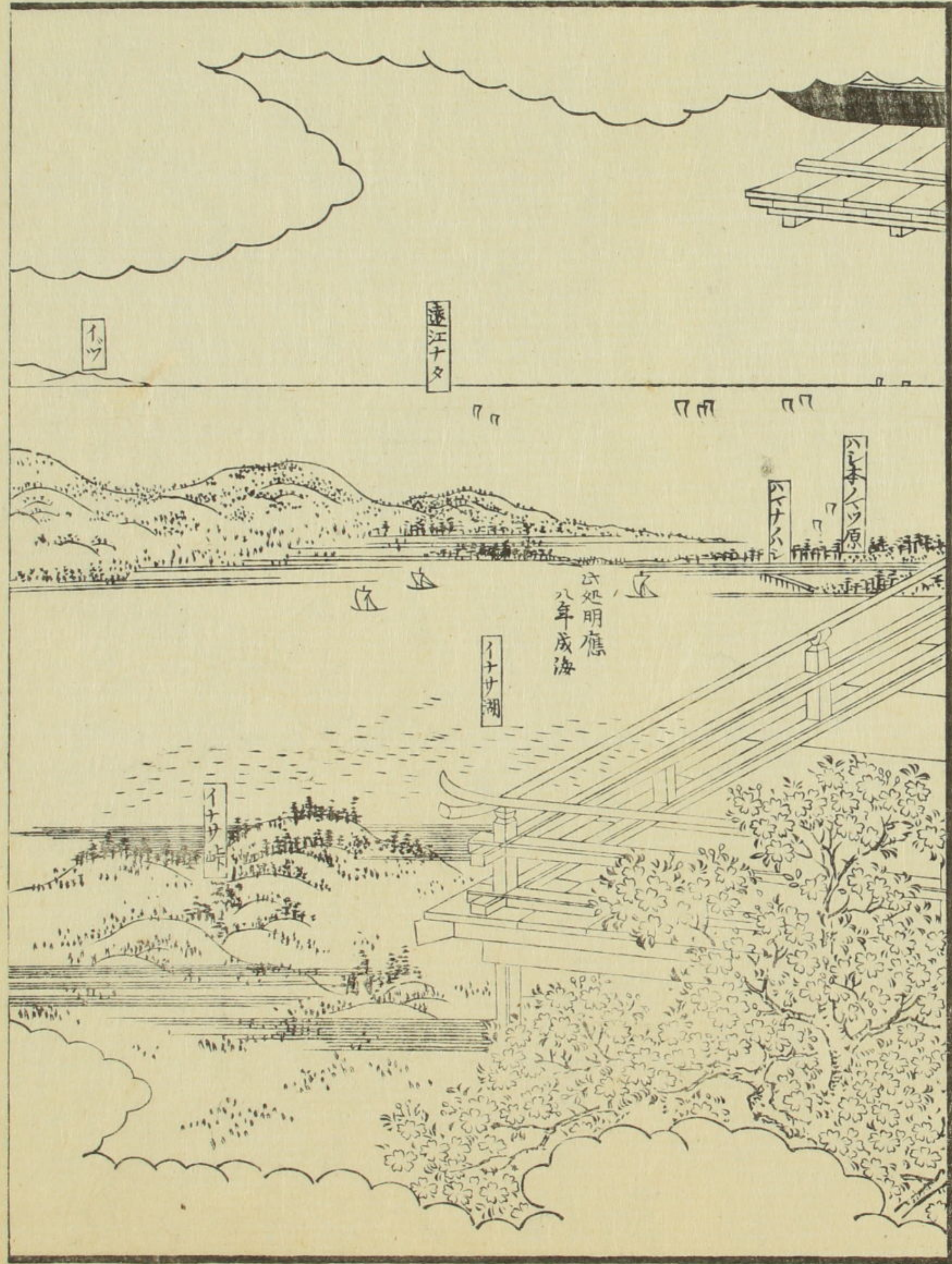
と共ともに伊い豆まめ乃なり三さん階かい乃なり新あらた風かぜ小こ遇あひ 秋あき小こありて 秋あき乃なり東あづま乃なり
と玉たまひしと云いふ乃なりの詠よみあるへく 乃なり御ご物もの終はらまりしととかや 此こゝ
乃なり乘のりを江えを志こころし 飄ひらきよひけるふ天あま龍りゆう乃なり灘なみと云いふあそ
浪なみ風かぜあそくあり二ふた三さん日ひ沖おきふたふはせよひけるふ 乃なり御ご物もの終はらまりしととかや 此こゝ
白しろ輪りん乃なり湊みなと 遠とほ江え國くに養やし原はら郡ぐん乃なり海うみ岸きし今いま白しろ羽は又またと云いふあそ
揚あげら也なり御ご衣えおとも潮うしほたせせを孫まごひしと云いふあそ

いづくを物ものとよまき以もつて苦くるしみ屋や敷しき片かた衣え袖そで乃なりよる乃なり浦うら浪なみ
義ぎ良りやう親しん王わう 尊そん澄てい法ぽう親しん王わう 乃なり御ご物もの終はらまりしととかや 此こゝ
一いつ乃なり伊い豆まめ乃なり三さん階かい乃なり新あらた風かぜ小こ遇あひ 秋あき小こありて 秋あき乃なり東あづま乃なり
地ち同どう乃なり伊い豆まめ乃なり三さん階かい乃なり新あらた風かぜ小こ遇あひ 秋あき小こありて 秋あき乃なり東あづま乃なり
と小こ梨なし花はな集あつまりし候さう 乃なり御ご物もの終はらまりしととかや 此こゝ
里さと陸りく路ろを井い伊い谷や乃なり入いり御ごありしと云いふあそ
乃なり時とき井い伊い谷や乃なり道みち改かへり女むすめ小こ親おやしと云いふあそ

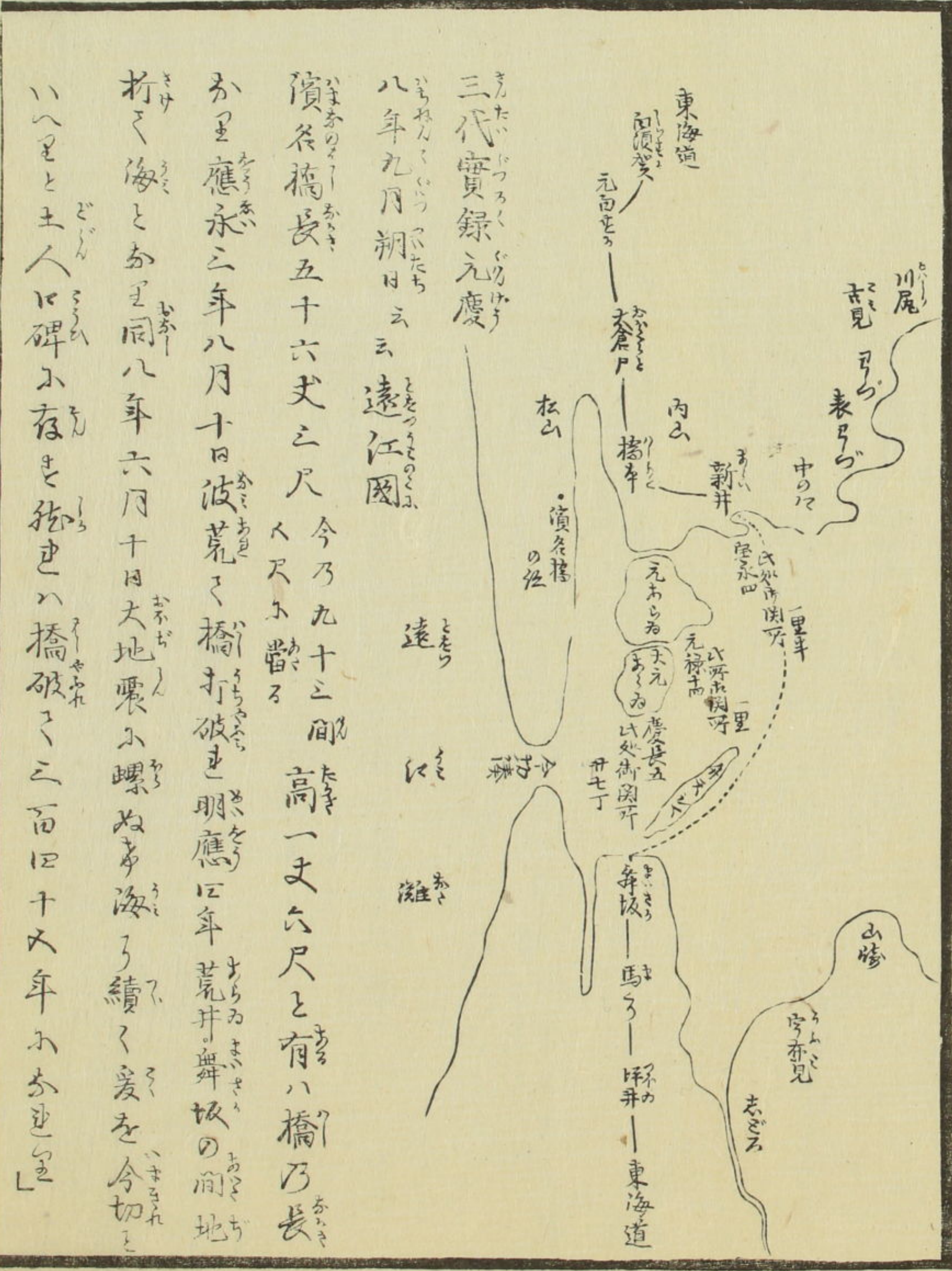
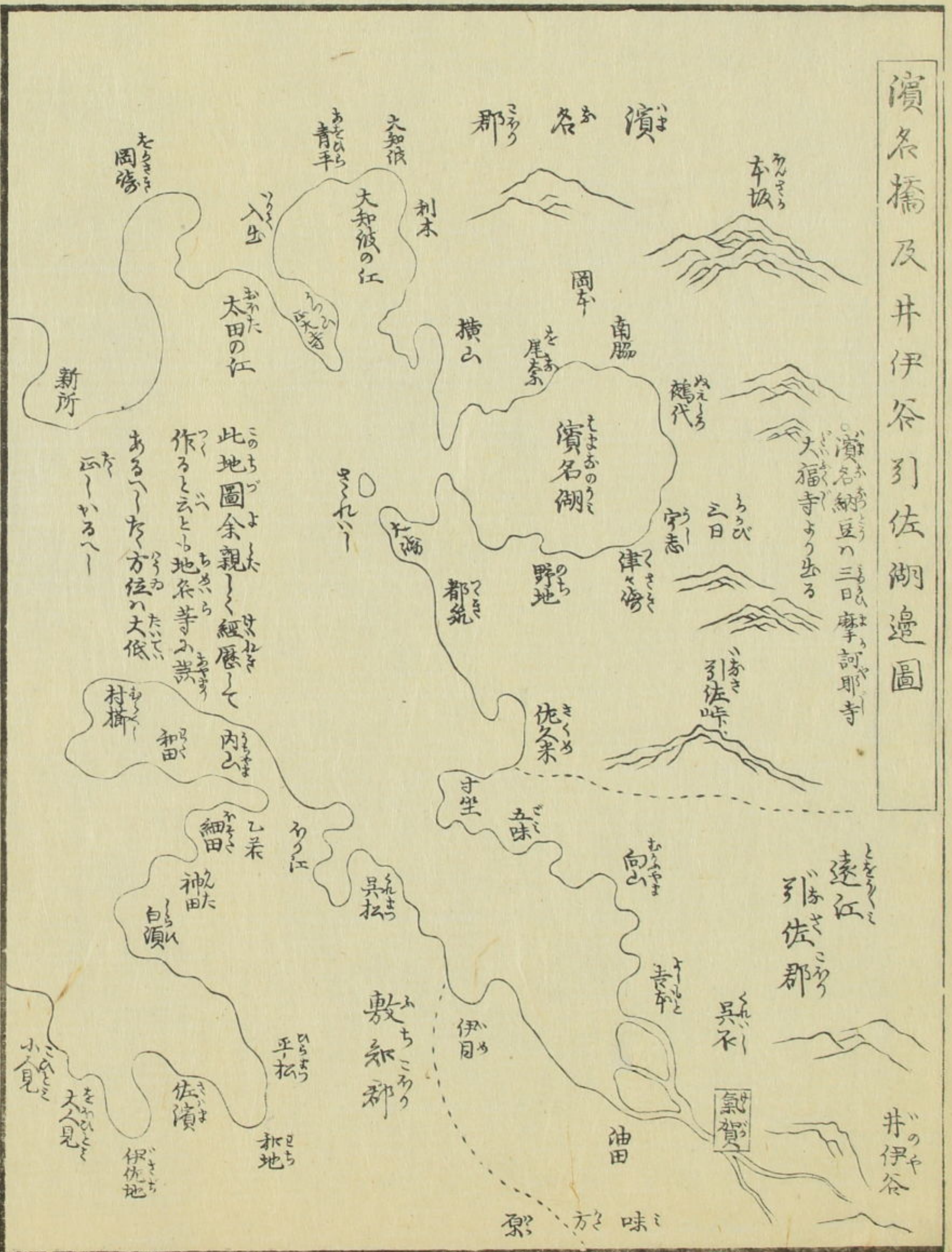
生あるけり今年ハに歳了あり勢あり入るに官乃入を
あ人を羨しく愛するをありあを御境
あせみけり二夜もく由旅衣ああつま乃嶺の崗
かくし志はく住をよひけり乃柱のりきあ
阿乃あさき乃柱のりきあひかや住あれん
又あ教乃障子

旅衣あせみけり年をあせしとあ終ぬる里の人の御境
かと詠興せよせあひく延元五年乃春井伊乃城よ
里濱名乃橋乃渡りく里橋本乃松系湊乃波のきく遠
とふと見りくき新朝暮乃々々を御境
夕くれの湊もそこと白菅の入海けりあむ海教もり

はるくと朝の塩の湊あせみ出教くハ程のきく
秋印本李花集子延元四年の春と書せ教も 去年乃秋
寫遠ひみく延元五年あてり事實いあせき
吉野を出せ勢ありとさより御還俗乃次ああせき
御名由宗良と改めら色征東將軍乃宣旨ありけり中城
國乃軍兵あ下せける令旨あ載ら色ハ信濃甲斐
駿河上野越後中あとり隠也居り新田乃門葉
をせり官方乃勇士を騰蛇乃雲を待得たる稜威をそあ
あつりける松色と由諸國關渡乃往來容易り寸ありせれ
皇天 去年八月十六日吉野行官乃崩御ありぬる
一と由漸あく八月十六日あ開けり色と由更ふ伝
と思し色ハ日數まて教うち何方より乃音伝も同悲の



濱名橋及井伊谷引佐湖邊圖



三代實録元慶八年九月朔日云 遠江國濱名橋長五十六丈二尺 今乃九十二間高一丈六尺と有ハ橋乃長
 万里應永二年八月十日波荒ク橋打破也 明應四年荒井舞坂の田地
 折ク海とあり同八年六月十日大地震小螺ぬ海了續ク爰を今切
 いへると土人に碑小存キ独也ハ橋破ク二百四十六年小水也

思ひ成るかきそふそふ言乃紫の及もぬりて開了快けても
又大塔乃志雲僧正乃許より下向あるへき由十されけ共
徒我ふ月日過けしハ

清見瀉か之乃関もる際もあつて松への快けし三穂乃浦風
かと仰らまけしとも遂に下向乃ことか一年乃辨も改里と
興國と云 延元五年四月廿八日を興國元年とせし元弘日記
不見也るを云しといひし和洋合運本朝年鑑等延元
二年十月五日改元同二年乃秋の頃まゝけ處小坐けし
とせりい説かるへし
と小味方小糸る勇士ゆかく斯くの勵く後事も有へ
小あつて甲斐信濃乃間了出所あつて勢を付むいやくと申
者あつてけし三出まゝとて特野命貞永をまゝめ二心かき
兵と小呂集らまけ終夜約束乃ことと語りひかり日比佐せ

五ひける處乃か庵子書付あふ

所をいふ小發河乃海乃おと乃浪するへかゝとて云たかれか
虚谷を夜深く出さそふ沖津みく夜ハ不乃くと庵勝乃
松原を朝霧乃絶間了露也清見り関乃戸も有咽の月
了あけたくせ所免しと

東路乃末まゝとせらぬ庵勝乃清見り関もあまの勢そふく
浮島原より車返と云里ふりし甲斐國小ハる 守津谷より里九
九子より府中へ一里半府中より江尾へ二里廿七町江尾より沖
津へ一里云町沖津より車返まゝ十里廿町あり車返と云る
今津乃甲斐國小入をまゝとて富士乃北方を過あふとて
あつてかゝ南ふかゝ今日いゝる富士乃麓をゆめぐるらん
おく甲斐國白頭 巨摩郡豊原と教來不
との向了白頭村あり 乃松原了休らせむい

て 地地乃松原分在
茂く〜麻のや〜

か里そめ乃乃乃のちとハ開ふといさやあさき乃松人由か
信濃國諏方乃至里着をよひく宇津谷より御送里ふ来
者とよを返させよ入と〜

富士乃根の煙を見く由居と〜よあさ由乃嶽ハ〜燃ると
爰より新田乃氏族乃住と開〜越後國寺泊ニ島郡ハ後
よ入〜歸雁を聞合〜

古郷と開〜越路乃空を〜に控うらと城く海乃金
北浦み〜後醍醐天皇第ニ卒乃御忌をむ入入時
只おる出乃八月乃秋の月よ〜と終と〜ぬる神計
遂り興國ハ斗ま〜越りお〜海乃終ハ

何れへふゆき〜るへくも何〜ぬ身の越路の冬を二年ハぬらん
比之年乃同寺泊ま〜ハ越中國名古浦 射水郡 乃石黒り
館ハ移里北國乃官軍を指揮お〜せら終御勢を〜ゆ
之越り振ハ〜ハ吉野より勅使を下されお〜りふあさ
信濃國乃番坂高宗ハ件より申旨あり〜ハ黙止やく〜思
め〜同又年信濃國伊奈郡大川原 高遠より遠江と云深
ハ乃興ハ後ら〜よハけ〜味方ハ美る兵ハ亦〜又何と
待座〜期ハ〜ハ〜ハ

不言思入谷乃ハ中苦〜き〜必を埋本と〜ハ成り
正平之年高師直吉野教を襲ハ〜り乃宮ハ火を放ち
也ハ皇居を宍生ハ後され〜ハ後新待賢門院塔尾御廟

乃花を一あき以文小包たづねかえらば之芳野ハ見みふ由よし非あらむ
荒あふり何なにか花はなハ控かゆと由よしとありまれハ

今いま見みる由よし何なにか控かゆをれり君きみ乃な涉せ教けうや花はな入いるらん

同七年新田元少将義宗同右兵衛佐義興脇屋少将義治

越後上野乃軍を起し足利尊氏乃鎌倉館を攻ける時小

宗良親王ハ信濃國乃官軍を發し碓氷嶺を越し武藏國

小手指原武藏國入間郡北野村入間川武藏國入間郡北野村を云いふ

をふさゆける武藏國入間郡北野村今日乃軍不勇を顯あせしむ建た仰おほしる序ついで不

君きみ乃なため身みのため何なにか惜おぼしむらん武藏國入間郡北野村甲斐かいあふ命いのちあす勢せいた

能よろ小新田氏族志勇餘あり義烈疾風乃なもも止と親おや王わうと

算勸機を動うごかしむ武藏國入間郡北野村ハ義興義治兩將軍進すすみ鎌倉かまくらハ打うち入いり

足利基氏尊氏を追落おし義宗乃尊氏を半價はんげん慶けい磨ま郡ぐん東とう磨ま川がわの東とう

北半きたはん濱はま村むら我われ不ふ審しん一いつか武藏國入間郡北野村とと輕かろ銳えい乃な驍將せうしやう遂つひに隊たい伍ごを亂みだし

後援ごえんの武藏國入間郡北野村以も退ひく笛吹ふえふ作しやく比企ひき郡ぐん將しやう助すけ不ふ陣ぢんしむハけるハ

尊氏乃大軍を揚あげ襲おそひ来きり戰たたかふ數かず合あふ及および義宗越後

をさし敗ま走はしけしハ親王乃碓氷を越し信濃しんのうハ入いり

此時主上後村上天皇賀名生乃行宮を出御いつ武藏國入間郡北野村ふ東條

小鳳こほう輦けんを廻めぐりさ武藏國入間郡北野村住す吉きち乃津守國夏つむぎの家いへを以もつ御ご所しよ

とあさゆそれより男おとこ山やま上のうへ臨幸りんしやうす武藏國入間郡北野村京きやう都とハ北きた畠はたけ准のり后ごうを

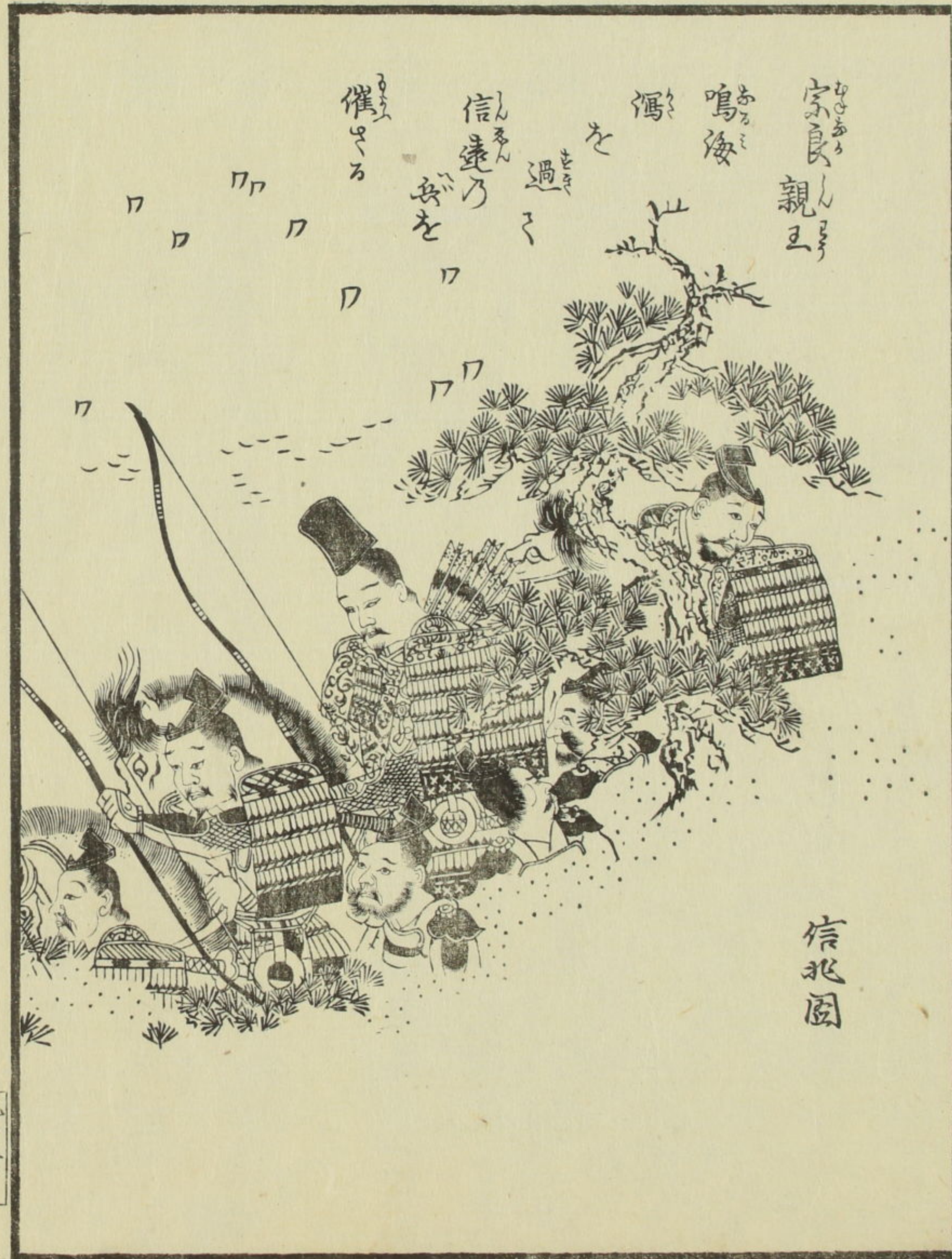
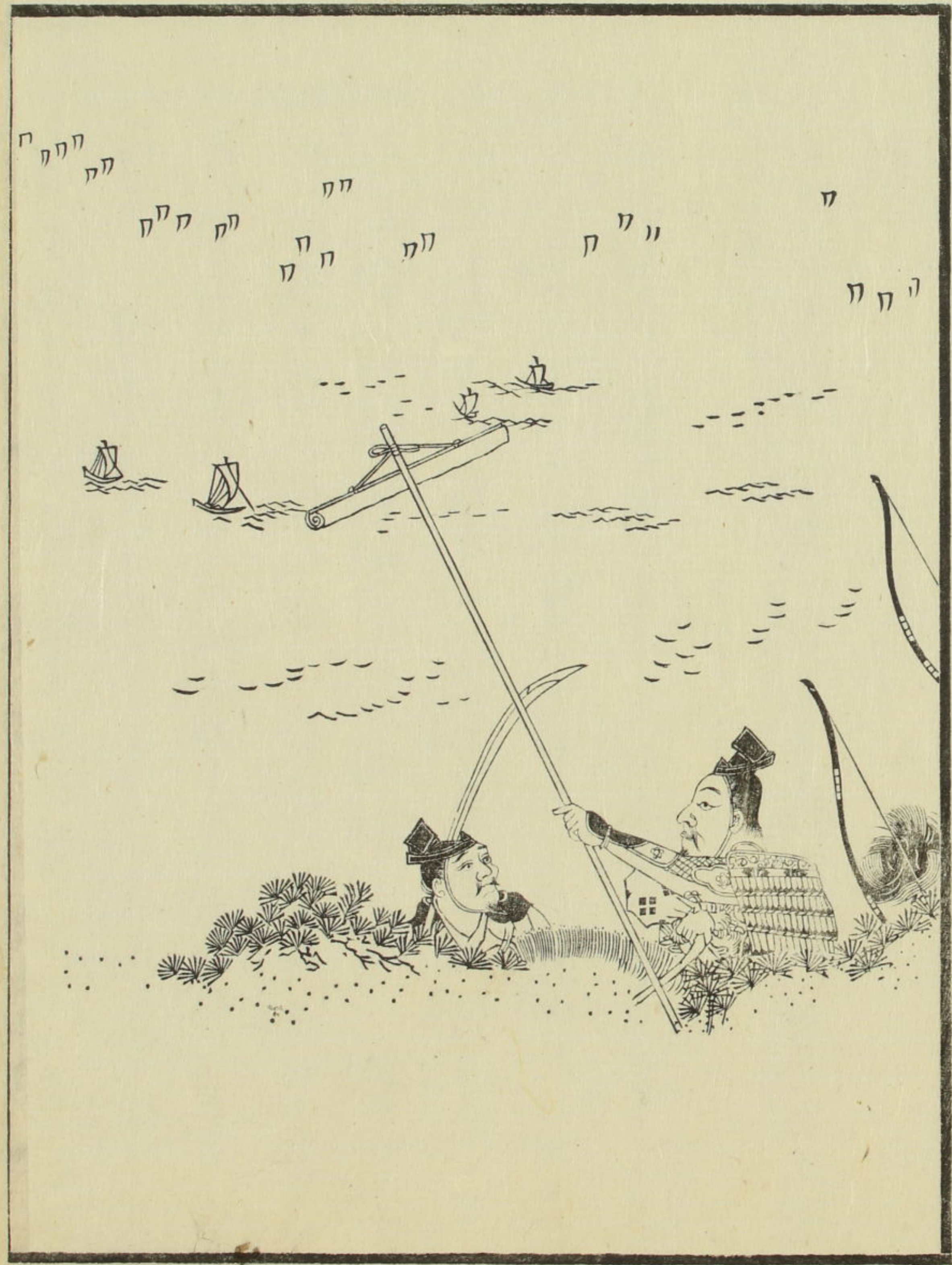
差さ乃なハ洛中らくちゆう乃萬機まんきを執とり武藏國入間郡北野村をを入いり武藏國入間郡北野村此こ期きをを入いり武藏國入間郡北野村以もつ武藏國入間郡北野村以もつ武藏國入間郡北野村以もつ武藏國入間郡北野村

良親王らうしん乃信濃しんのう乃官兵くわんべいを引率いんそつし武藏國入間郡北野村子こを合あはせ武藏國入間郡北野村ら武藏國入間郡北野村教けうへ武藏國入間郡北野村は

宣旨せんしをを入いり武藏國入間郡北野村ととも武藏國入間郡北野村若干わくかん乃國郡くわんぐんを隔へり武藏國入間郡北野村ハ事こと神速しんそくハ

行もせき一日くと過し五ひけふ内ふ湯川庄司矢野某等
謀叛し男公乃御所を襲ひ奉りけしは上南都へ遷
幸ありし漸賀名生へ還幸すゆけるに聞えしは
御方小生と涯分乃忠を致しける者も俄ふに禁
て敵り馳加るるけしは鬼角まゝの間ふ又二年三年とせ
正平十年ふありぬ爰ふ信濃國諏訪郡御方小生
國中を催しける仁科乃一族後野門葉我少と馳
集り親王指迎ちる鎌倉へや寄り遠江之河へや打出ん
かと軍議區くあまける時親王下諏訪乃實前ふ通
たのせを移しけるふ湖上乃月くゆかく秋風いさよ
かひしーかた

諏方乃海や神の誓乃いあせの秋さへ月乃氷くくら
能るふ仁科と諏訪と先後を争ひ遂り互ふ偏執を起し
仁科急る軍兵を引か越後へ立越新田と一手ふか敷
程り信濃國乃習ことし雪のつより早く降る色に他
むと叶くく諏訪みく年を越せ玉ひ明は正平十一年
より越後信濃軍兵を召具せらば本曾路を義濃國
よりせ玉ひけるふ御方乃兵氣振を休せし思ひく都へ入
玉ひ北野天満宮へ百首歌よみ法樂せよ玉入中ふ月を
大空を照らす月かあくれぬ乃光あそ秋とお入
正平十五年四月征夷大將軍興良親王謀叛を起し賀名
生乃行宮へ火を放ちあそ玉入りより玉上
後村上
天皇



へ皇居を移さば興良乃職を停めらば宗良親王を征夫
大將軍了かきせ給ひて也
おりのひもや子もふれさう梓弓おきり我必あねんものとい
實ふも圓頓止觀乃學乃窓乃螢雪乃光を集められん
御身すいつし甲冑を着せらば朝暮了馬了携り合戦
乃機變を宗と托せ所せんとの思ひもよるぬ御事あるをや
さくしも有へきからぬの諫訪高坂以下の官軍を催しむ
住吉乃皇居へ赴りせらばんと御んをうりの早らせらば
かとも路隔る境遠く思召すも軍まきまきり
よ里又伊予郡大河原了屯し御方乃兵を召せ
ハ更科乃里み位をむいし

諸共了をハきくふを越ぬとの都ふやくせりしは乃月
方とかあてせむひん巾里かや本曾路乃河音高く
ふ咽ひ浪乃氣色ん細けあるを御覽し
本曾路川うらたへ瀬く乃浪からのゆめくも三浦らばし
かと興をらばそれより惠土波かとり義濃をふを踏分て
尾張國犬山うり鳴海乃浦ふ後里位をむいし
山路より破色乃里ふらへきく浦めつりし旅衣か
同十七年住吉乃行宮よりあし乃八月十六夜乃月面白
のりくはり見つらんかと作らば御製衣
年経ぬるひか乃夜居の秋ハあせと月冬都と思ひたされ
と有し御返事

いづせん月も都と老を人表を之乃を秋乃ゆり
月不乘也ハ出たり秋を我をささく乃ハとあけく
と中ハ所をふハ乃を同女二年二月十一日王上住吉
あく崩御申御事ハ宗良親王ふく歎をささくハ
かはやそぢち文中三年ふり親王を吉野教へ
らさる也如意輪寺にて日野僧正頼意を導師とて後
村上天皇七回御忌を修飾せさせ玉ひけること

義春を散く見とらんうけか花も昔の別也あは
天授三年より吉野不伺候せさせらる也又信濃國下向
あふゆる定めあく吉野を立出玉ひ也とハ略次ハ障ハ
とあつと長谷寺ハ入せらる也あつと御髪を剃して

さ勢ら也河内國石川郡山田村了隱也位を弘和元年
御年七十ふあをさへハ老乃御んをさかへハハ末の
世了遺を玉ひんため元弘よりこの吉野宮にて控られ
たる御製をさめハ卿教上人あふハ武勇乃輩隱遁乃倫
女院皇后女御更衣ふりハまを抄ふ也時ハハハハ云現
せハ言乃紫凡ハ百餘首ハ卷新葉和歌集と名付玉ひ
ける也勅撰了准せら敷ハハ宣下ありハハハ十二月六日
奉院世所を玉ひし其後了信濃ハ御下向ハハハ
此ハ里ふり豊中備へ今ハ山田村ハ谷と云ハハハハハ
廣谷寺ハ宗良親王御居乃地ハハハハハハハハハハハ
親王乃御子尹良親王乃御傳ハ別ハハハハハハハハハハハ

欣子内親王降誕乃年月を記きそのを見以永秋を御
母方乃流を汲きよへ前裁乃霜の色を御覽し
霜の熟く子種の花乃離る秋よりより哀なりと
と詠しよひくと又永永百首歌ふ歳暮を
もくくとよひく年乃末の松老乃出せやまて越事
よゆきよひく歌の新續古今集ふくく世帯くま色哉
吟賞を後ふハ尼とありせらる暖熾乃今林くくゆ
就鳥尼とゆきとや
瓊子内親王ハ欣子乃妹了すゆきと云と也御年の程
詳りあらき紅梅乃枝了つけく賜子内親王
許へ遣きよけふ御歌
乃皇女

ゆきよひく風乃つるよ同色ねハ白入甲斐あき霜の梅枝
賜子内親王乃返し

と云くあき見る甲斐もあきゆきゆを也他ハ隔ぬ梅の白
と云贈答新續古今集了載ら也たり

御即位以前了豊ゆひハはるく三位を贈らせよひ
それハ宗良親王子首歌を為定卿乃許へゆきゆありと記
贈るよ乃をよけぬ絶きと

散るくはゆき乃杜乃名抄そとよきゆハ乃乃乃を也
と詠よひくよけ也たり

女御ハ三位を贈らせり仁明天皇乃後原贈皇后澤子
乃承和六年四月乙卯卒き時從三位を贈らせ也

此書を始とあまると云と小桐壺女御乃ためしあををこれの
 謀かたぬ人ありけかふやたし皇太子即位ありしに贈
 位の各別たふへし権大納言局も後二条院に事ありり
 と云と小命婦乃朝冬禁内礼式を典を以て宮闈に侍せ
 るふはの牆有茨乃識をの免つる其所生のそりく文と
 武とを備ふ入る母氏聖善慈訓乃敷及とありかふ魚

先進繡像玉石雜誌卷第九終

男信北圖畫并技

天保十四年閏九月廿三日

栗原孫之丞信克藏板

大坂書林

江戸書林

心齋橋通北久太郎町	河内屋喜兵衛
心齋橋通備後町	河内屋外助
心齋橋通本町北	河内屋和助
心齋橋通博長町	河内屋茂兵衛
日本橋通一町目	須原屋茂兵衛
日本橋通二町目	山城屋佐兵衛
日本橋通二町目	小林新兵衛
中橋廣小路	西宮弥兵衛
芝神明前	岡田屋嘉七
日本橋四日市	上總屋總兵衛
大傳馬町二町目	丁子屋平兵衛
横山町三町目	和泉屋金右衛門
浅草茅町三町目	須原屋伊八
下谷池之端仲町	岡村庄助
下谷御成道唐人館横町	紙屋徳八

